

本論文の目的は『わたしを離さないで』とは母胎内回帰の物語であることを明らかにし、それがイシグロ作品群の中心軸であることを示すことで、人間とは何かという問いに迫りたい。

<ヘールシャムとは何か>

ヘールシャムとは、この小説の語り手であるキャシー・Hをはじめとする、臓器提供のために創りだされた人間のクローンが、幼少期から16歳までの期間を過ごした施設の名前である。ヘールシャムでは〈生徒〉と呼ばれるクローンである子どもたちが、〈保護管〉の指導の下で教育を受けている。絵画や詩、彫刻などの制作が義務付けられ、作品として提出することになっているのだが、その目的は子どもたちには知らされていない。ヘールシャムがなぜ存在し、何を目的として運営されているのかは小説の後半、最終章の前章になりようやくミス・エミリーによってキャシーとトミーに明かされる。ミス・エミリーによれば、それまで劣悪な環境で育てられていたクローンを、待遇を改善し、人道的で文化的な環境で育てれば、普通の人間と同じように感受性豊かで理知的な人間に育ちうる、ということを示したことが、ヘールシャムの最大の功績であった。それではヘールシャムとは一体何を象徴し、子どもたちにとってどんな存在なのであろうか。

ヘールシャムは外界と隔離されており、その内部において完結した世界である。子どもたちをそのような世界で育てることは、「保護する」ためではあるが、同時に「嘘をつき」、「騙す」ことでもある。しかし、これは単に子どもたちが臓器提供のために創られた存在であるという事実を隠し、子どもたちを騙したということだけではない。『わたしを離さないで』の出版に際して行われたあるラジオ対談で、イシグロは“Everybody wanted to censor out the sadnesses of the world. They desperately wanted this little child to be deceived about how nice a place the world was.”と語っている。つまり、人間のクローンである子どもたちがヘールシャムという外界から隔離された世界の中で育つプロセスを通して、この小説は我々の子ども時代を、また我々が子どもから大人に育つプロセスを再現したのである。そうすることでイシグロは我々の子ども時代とは保護され、嘘をつかれ、騙されたものであるということをメタファーとして描いたと言える。しかし、ヘールシャムに象徴される事象は「子ども時代」のみに留まらない。

ヘールシャムは緩やかな窪地にあり、外界へとつながる出入り口は、長く狭い道を通じる正門ただ

1つである。ヘールシャムを描写するために使われている hollow、narrow road、gate という語句の纏まりからは「子宮」のイメージが喚起される。『イメージ・シンボル事典』によれば、「hollow くぼみ 1 ほら穴を抽象的に表したもので、母のシンボル、無意識などを表す。」ちなみに、ほら穴には次のような象徴的意味がある。「cave, cavern ほら穴 1 原始時代の家、子宮、母を表す。」さらに、門には「gate 門 1 a 通路、女性的なもの、陰門を表す。」という象徴的意味がある。ヘールシャムから正門へとつながる narrow road とは、ここでは産道を象徴していると言っても過言ではない。

つまり、ヘールシャムとは「子宮」であり、“possible” 探求や座礁した舟を見物しに行くといった印象的なエピソードの深層に流れる「母胎内回帰」という物語が姿を現してくるのである。

<母胎内回帰の物語>

“possible” とはクローンたちの複製元である“可能性”のある普通の人間のことを指す言葉である。言わばクローンにとっての「親」である。キャシーたちクローンのほとんどはヘールシャム時代に“possible”についての知識を得ているが、その繊細で微妙な問題が話題に上ることは稀であった。しかし、扱いにくい問題であるからこそ興味を引くものでもあり、多くのクローンたちにとって“possible”とは一目見てみたい存在として頭の片隅にあるものである。

“possible” 探求のエピソードは2回あるが、キャシーとルースの“possible” 探求のエピソードがあるのに対し、トミーの“possible” 探求のエピソードはない。主要な3人の登場人物であるキャシー、ルース、トミーのうち、なぜキャシーとルースは“possible” 探求をし、トミーはしないのか、ということを考えると“possible” 探求とは一体何を探し求めているのかということが明らかになる。

キャシーとルースは人間から複製されたクローンであるから、その複製元である“possible” は当然のことながら女性である。この“possible” が女性であるということが、さらに言うならばキャシーやルースとは絶対的に異なる女性であるということが、なぜトミーだけが“possible” を探さないのかという問いの答えを考える手掛かりとなる。ここで言う絶対的に異なるとは、「クローン」と「普通の人間」との差異に言及するものではない。キャシーやルースと、彼女たちの“possible” との間で絶対的に異なる点というのは、「子宮」を持つか、持たないか、という点である。ミス・エミリーは、

外界の人間は〈生徒〉たちと異なり性行為によって赤ちゃんが産まれると言い、さらに〈生徒〉たちは赤ちゃんを産むことは完全に不可能であると言う。クローンとは、女性が生まれながらにして備え持つ「子宮」を剥奪されていることにより、普通の人間とは異なり性行為で赤ちゃんが産まれず、赤ちゃんを授かることが構造的に完全に不可能なのである。

つまり、“possible”探求とは「子宮」を探し求める行為であると言うことができる。トミーの“possible”探求のエピソードがないのはこのためである。親を持たないクローンという存在が幻の母親を探し求めることは、母なる子宮を希求するという『わたしを離さないで』の主題と密接に関わり合っている。

イギリス中のクローンたちの間で話題になっている沼地で座礁した舟をキャシー、トミー、ルースの3人で見物に行くというエピソードがある。なぜクローンたちはこぞって座礁した舟を見に行きたいと望むのだろうか。ただの打ち揚げられた廃船に、〈提供〉で衰弱した体に鞭打ってまで見物しに行くほどの魅力があるのだろうか。

彼らは森を通り、フェンスを潜り抜け座礁した舟のある沼地へと進む。この場面では彼らのヘールシャムへの帰還が擬似的に表されている。3人の、屈んでフェンスを潜り抜けるという行為は、子宮内への逆行、すなわち母胎内回帰を表す。というのも、ヘールシャム裏手の丘の頂には、その影でヘールシャム全体を覆ってしまうほどの森があり、ヘールシャムと森とはフェンスで仕切られていたのだ。座礁した舟のある森とヘールシャムの森は時空間を超越した地続きの森なのである。辿り着いた先に待つ舟には「boat 舟〔(神の)母なる子宮 mother-womb〕3〔心理学〕再びめぐりあったゆりかご(子宮)を表す。」、という象徴的意味がある。クローンたちは“possible”探求と同様に、またもや「子宮」を探し求めていたのだと言える。

クローンの自らの運命に対するあまりに受動的な態度には疑問を持つ読者も少なくない。しかし、母胎内回帰という観点から見ればクローンが反乱を起こさないのも当然と言える。トミーが恋仲にあるキャシーとの関係を川に喩える場面がある。川の流れの中で2人は固く抱き合っているが、結局は別々に流されてしまう、永遠に一緒にはいられないとトミーは言う。川には次のような象徴的意味がある。「river 川 7 冥界と現世を隔てる自然の障壁。または冥界への入口。しばしば、子宮 - ほら

穴から流れ出る。」川に流されるキャシーとトミーは、ヘールシャムという「子宮」から産み落とされた赤ん坊であり、どんなに流されまいとしても出生という摂理には抗えず let go されてしまう存在なのである。それゆえクローンには逃亡や反乱を起こす契機がないのである。クローンは、この世に生まれたという事実から逃れられず、出生の摂理には逆らえないという人間の本質の一面を表したメタファーなのである。この小説のタイトルである“Never Let Me Go”とは母胎から分離された子が「わたしを離さないで」と母親に懇願しているのである。

<カズオ・イシグロの精神的外傷>

精神分析学者のオットー・ランク(Otto Rank, 1884-1939)は、1923年に「出生外傷」の論文を完成させ「人生の本質は母と子である」と明言している。出生外傷とは誕生時の母親からの分離がもつとも外傷的な体験だという意味である。さらにそこから転じて、「まったく別の環境におかれた人の不安」、「あまりに性急な環境変化が人に心の傷を生みだす」という概念である。

ランクは神経症患者を創造しないことに対する罪悪感を持つ、挫折した芸術家と考えていた。そして、芸術家こそは自らの創作活動により出生外傷を克服する者であると考えていた。この概念は、イシグロの創作活動を考察する上で非常に有益である。なぜなら、ある意味でイシグロは芸術家としての挫折を経験し作家になったからである。青年であったころのイシグロはロックミュージシャンになることを夢見ており、自作の曲をいくつもの音楽出版社に送り付けていたのである。しかし、どこからも声がかかるとはなく、作家としては経験したことのない拒絶をイシグロは味わった。

また、イシグロが5歳のときの渡英による環境変化で経験した、日本という帰るところの喪失、そして祖父との別離はイシグロの心に「傷」を負わせたと想定することは困難ではない。彼にとっての渡英は、長崎での子ども時代＝「気泡」の中からの放出であり、出生の再体験であると言えば、やや言い過ぎであろうか。しかし、彼の「私が作家になったのは、私が日本からの「亡命者」であることに大いにかかわっています」という発言からは、日本という母国からの分離が彼の創作活動の重要な動機であることが窺える。さらに、イシグロがイギリスにいる間に祖父が亡くなってしまう。再会を果たすことのないまま、父親代わりであった祖父を十代半ばで失ったイシグロ少年の喪失感は計り知れないほど深いものであったであろう。ランクによれば、親密な人間の喪失は原始的な母からの分離

を思い起こさせるものである。やはり、イシグロはなんらかの心の「傷」を負っており、その「傷」を克服するために小説を書いていると考えられる。

ヘールシャムとはイシグロの根源的なテーマである「気泡」(子ども時代)が具現化されたものである。そしてそれが「子宮」を象徴していることは先述したが、そもそも、親によって保護され、人生の厳しい現実から守られ、世界がより良い世界であると信じ込まされていた、牧歌的な子ども時代を言い表すのにイシグロが用いる「気泡」という語からして、「子宮」を連想させるものである。イシグロは『わたしを離さないで』において、誕生から死までの直線的な運動から逃れられない人間の本質をメタファーとして描いただけでなく、自らの母性憧憬を作品として昇華させているのである。